
純白の切り裂き魔

しんどうみずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純白の切り裂き魔

【Nコード】

N00521

【作者名】

しんどうみずき

【あらすじ】

霧の都、ロンドンを恐怖に陥れたジャックザリッパー。その正体とは……。

(前書き)

この話はフィクションです。

窓の外で、雪が吹き荒れている。純白なはずの雪は夜の闇に染められていて、ただの流れにしか見えなかった。

歴史ある大きな屋敷の書斎。英字の、ぶあつい本が行儀よく書棚に整列している。何段にもなった棚は、隅からすみまで埋め尽くされていた。

暖炉にくべられた薪がぱちぱちとはぜる音をたてた。レンガで造られた白い暖炉の中ではオレンジ色の炎が揺れ、しっとりと薄暗い部屋を包みこんでいた。

本に見下ろされるようにして、部屋の中央に二人の人影があった。その内の一人である老人は暖炉のそばにある古びた安楽椅子に腰かけている。時折、銀髪の老人がゆらゆらと暖炉から延びる影のように揺れていた。その度に曲線をえがく椅子の足がやわらかな絨毯に吸い込まれていく。

「寒くはないかい」

外見と比例するように重みのある声だった。喉の奥にかかる、懐かしい声。それでも発音は明瞭で、言葉が聞き取れないというようなことはなかった。

「うん」

もう一人の話し手が答えた。金髪の坊ちゃん刈り。質の良い黒いサスペンダーを着込み、青い瞳をしている。

少年は、老人とつやのある丸机をはさんで、暖炉のそばに座っている。赤と黒の模様が美しくまじりあっている絨毯の上に直接、腰かけているのだ。

老人は赤い瞳をほそめて、

「じゃあ、そろそろ始めるとしようか」と、言った。

赤い、といっても充血しているわけではない。純粹に深紅の瞳なのである。

少年がこくりと頷く。

パチン、とたきが割れた。それに連鎖するように、ひとつ、ふたつ。

「あれは、まだロンドンがスモークの街だったころの話だ。霧の都といわれるような時代だよ。あの頃はちょうど、産業革命が起こってすぐだった。どこもかしこも汚れていてな、呼吸するのも嫌になるときがあったよ」

老人が、懐かしむように遠い眼をしながらいう。

少年もその時代のことはよく知っていた。見たことこそないが、写真は探せばいくらでもある。瞼を閉じれば、雑然としたロンドンの街並みが浮かんでくるようだ。

「公害こそあれど、実に繁栄していた。急成長していたんだな。どこもかしこも活気にぎわっていて、目に輝きがあった。そんな希望の苗を、次々と刈り取っていったのが――」

「ジャック・ザ・リップ」

少年が答えを引き継いだ。

ロンドンの街を席卷した、伝説の殺人者。

「そう。十九世紀の後半のことだった。連続して五人の女性を殺し、栄えるロンドンを恐怖による沈黙で覆ったのだよ。結局、彼は警察に捕まることはなかった。犯行の前に署名の入った手紙を新聞社に送り付けても、ついに正体を明かすことはできなかった」

その後、百数十年にわたって犯人は誰なのか、諸説くり広げられてきた。それでも誰が犯人だ、という確定した情報はない。

時がたつにつれて記憶は薄れ、真実は遠ざかっていく。壁に染みついた鮮血と同じように、色褪せていくのだ。

「歴史に残る大事件だったことは間違いない。それなのに犯人が分からないのはなぜか――わかるかい」

少年は静かに首を横に振った。

それはそうだろう。どんなに知恵をひねっても、証拠を集めても、真相は幾重にも入り組んだ憶測のガラスに阻まれて、手に取ることはできないのだから。

「それはグランパが知っていることでしょ」

「その通り」

グランパと呼ばれた老人は、軽く笑った。背もたれに寄りかかって、安楽椅子を小さく揺らす。

木のきしむ音が心地よく耳に響いた。

「アルビノ、という言葉を知っているかな」

少年は、今度は首を縦に振った。

白い肌との対比があざやかな、真っ赤な唇を開く。

「まっしろな肌に、グランパみたいな赤い瞳孔。先天的な病気で、人間にも発症することがある、そうでしょう」

老人は満足げな表情を作った。

少年がふたたび口を開く。

「まるで、バンパイアみたい」

老人のしわくちゃな耳がぴくりと反応したようだった。暖炉の光で延びる長い影が、小刻みに動く。

風向きが変わって、降りしきる雪嵐が窓をたたきつけた。

水気の少ない氷の粒はさらさらと落ちていく。

「そうだな。バンパイアみたいだ。だが、人間とバンパイアは違う。それをジャックは履き違えてしまっていた」

「知り合いだったの？」

「ああ、あれはまだ私が若いころだったけどね」

「すごい……」

その一言であらわすには、少々荷が重いだろう。なにせ、その中には真実につながる鍵が眠っているのだから。少年の瞳がきらきらと輝き始めた。

かつては聞くだけで震え上がった話でも、現代に語られればそれは興味のそそられる昔話となるのだ。時の河は全てを押し流してい

く。

「あやつは生まれた時から陽の光を浴びることができなかった。いつも昼間は家の中で本ばかり読んでいたよ。特に、吸血鬼の物語を好んで読んでいた。吸血鬼が夜ごとに女性の生き血をすする話だ。どこか自分と重なる場所があったんだろう。そしていつしか、あやつは自分を本物のバンパイアだと思い込むようになっていた」

皮肉な運命だ。老人がそう呟く。

彼だけが、全てを知っている。

「ある時、あやつは私に言ったよ。血とはなんと甘美なものなのだろうな、と」

全身に鳥肌が立った。たしかに容姿こそ吸血鬼にそっくりではあったが、中身は真正正銘の人間なのだ。

血を好む人間が、ろくなことになるはずはない。

「そのままあやつは大人になった。成長しても肌の色は変わらなかった。変わったのは、あやつの心だけだったな。ロンドンの夜空のように、どんどん曇っていった。今でも悔やまれるよ、あのときあやつを止めることができるのは私だけだったのだから」

老人はため息をついた。少年がすかさず訊く。

「グランパとジャック・ザ・リッパーはどういう関係だったの」

「あやつと私は友達であり、親子のようなものでもあったな。あやつの両親とは親交があって、その関係でよく出入りしていた。よくなついていたよ、私はいつでも話し相手だった」

世の中の不思議について語り合い、窓からのぞく風景に心寄せあった。歳の差はまったく障害にはならなかった。

「病気だからと甘やかされていたのも悪かったのかも知れん。あやつは確実に、心の中でうずまき衝動に水をやっていった。屋内でため込んだ肥料と、日光のあたらない環境は絶好の畑だったのだよ」

殺意という芽は、着実に枝葉を茂らせていったのだ。天井のない場所、やがてどす黒い殺意は天を突き破ることになる。

「私も油断していた。人間という生きものに潜む狂気を甘く見てい

ただよ。長年の経験で見てきた者の中でも、あやつはとびきり破壊に近かった。そして、最初の殺人が起こった」

しずかな書斎には少年の、ごくりと喉を鳴らす音と、空間に溶け込んだ音色が満ちている。

物悲しい声色。後悔という感情が言葉の端々にちりばめられていた。

「あやつの危険な予兆には気づいていた。しかし、あやつは夜にか動くことがかなわない。そのあたりに隙があったんだろう。ある夏の晩に、一人の女性が襲われた。喉を引き裂かれて、無残な姿で発見された時にはもう手遅れだった」

夜霧の中で成し遂げられた凶行。ジャックの欲望は収まることを知らず、むしろ増大していく。

「そのころにはあやつの両親も口出しできないようになっていた。あやつが夜ごとふらりと消えては、朝日が昇る前に帰ってくるのを黙って見守ることしかできなかったのだよ」

「ジャック・ザ・リッパーは本当に自分のことをバンパイアだと思っていたの？　いくらなんでも非常識だよ」

「普通はそう考えるだろうな。でも、あやつに常識を身につける場所はなかった。知識はすべて本の世界から得た。脳内で生まれる誇大妄想だけが、あやつの動力となっていたんだ」

ちよっと想像がつかない。

「いちど走り出したら、止めるのは骨が折れる。連鎖的に女たちは屍となり果てていった。ロンドンの街は恐怖のどん底に落ちたよ。深夜は絶望の時間帯となった」

暴走列車は壊れるまで車輪を回し続ける。その途中でいくら人が巻き込まれようと、車輪が外れ、車体が崩れ落ちるまで雄叫び上げる。

希代の殺人鬼は静かな叫びをロンドンにこだませた。

「確定しているのは五人だとされているが、本当はもっと多かっただろう。私とて、全員の素性を詳しく知っていたわけではない。あ

やつが手にかけて人数はあまりに多過ぎたんだ。否が応でも、私は気がつかざるを得なかった。信じたくはない事実だったがな」

「どうしてすぐに止めなかったの？ グランパならできたはずですよ」

少年の疑問は、ガラスのように透きとおっていて。そして、鋭くえぐった。

「ああ、私があやつのことを切り裂きジャックだと確信したのは、三人目の被害者が出た時だった」

「だったらどうして」

「目をそむけたい事実だった。私はあやつがいかれた殺人狂でないことを証明しようとして、さらに泥沼にはまっていった。まだ調べ終わっていない。他の証拠があるかもしれない。そんな風に逃げ回っていたのだよ」

幼い時分からかわいがっていた真っ白な少年が、手を赤く染めている。決断までには、ながい時が必要だった。

老人はことさらに厳しい表情を作った。

「私もとうとう見ていられなくなった。いや、見ていることしかできなくて無理やりにも消してしまおうと思ったのだ。私はあやつを呼び出し、心臓に木のくいを打ち込んだ」

月光が川面を照らすなか、血に汚れた一つの命が無に還った。おのれを吸血鬼だと思いこみ、生き血を求めた哀れな人間は死んだ。

「だからいつまでたっても犯人が分からなかったんだ……」

少年が呟く。老人の乾いた唇から紡ぎだされた物語は、あまりに残酷で悲しいものだった。

おもわず天井を見上げた。

「事実っていうのは不思議なものだね、グランパ。だって、虚像が実像を奪ったのだもの」

バンパイアという、儚い夢が宝石のような生命を粉々に砕く。

鏡の表面と裏側が交錯し、入れ替わる。

「そうだ、な。でも、あやつは確かに存在した。深い爪痕を、ロン

ドンに残していった」

老人が疲れたように言った。安楽椅子の上でゆっくりとまぶたを閉じると、少年に向かって話しかけた。

「もうこれくらいにしておこう。ずいぶんと重たい昔話を聞かせてしまったな」

「ううん、すごく興味深かった」

「そうか。なら、この悲劇は胸の奥にしまっておいてくれ。そして、後世にひそかに残していけばいい」

「わかった」

少年はいくらかしびれた足をなんとか動かして、立ち上がった。

その時にふと疑問が頭をよぎる。

「グランパはいつたい何歳なのさ？ 僕にはまるで、不老不死のよう

に聞こえたけど」
老人は声をあげて笑った。つられて、少年も笑顔を見せる。どこか違和感のある、硬い表情であった。

「そうだよね、バンパイアじゃあるまいし、不老不死だなんてありえないよね」

「そうだな、面白い冗談だ」

あいかかわらず、窓の外では雪が降っている。年季の入った本に囲まれた書斎は暖炉から感じる暖気におおわれて、ほのかにぬくもりがある。

少年は何もいわずに部屋を出た。

最後に垣間見た、祖父の長く鋭い犬歯が頭から離れなかった――。

「――ふう……」

老人はすべての力を抜いたように、ぐったりと安楽椅子にもたれかかった。

そして誰に語りかけるでもない静かな呟きが唇から洩れる。

「何かを思い出したわけではなかったようだが……」

最期のとどめを刺そうというところで、情が移った。

真の親子ではなかったけれど、罨にはまった子ウサギのように震えながらも生に固執するジャックの様子を目の当たりにして、手が止まったのだ。

凍りついたように全く動けなくなった純白の両手は、哀れな殺人鬼を抱きかかえていた。

そろりそろりと無防備な首筋に近づけていった鋭い歯は、柔らかな血管を貫いて。

バンパイアに噛まれた人間は、同じくバンパイアになるという運命を背負うことになる。その代償として純粋なバンパイアの時流ははじめ、ゆっくりゆっくりと命が削られていく。

半分だけの吸血鬼はその代償として記憶をなくした。それと同時に、長い眠りについたので。少年の姿になったジャックが目覚めたのは、数百年の年月が流れたころだった。

「今度こそ、間違えうわけにはいかない……私の命が続く限り、歴史を再び繰り返させるわけにはいかないのだ——」

古びた洋館に眠る、小さな昔話は確かな決意に守られて。

間違ってしまった選択を——運命を、変えようとしていた。

(後書き)

いかがでしたでしょうか。

感想などいただけると、作者がとても喜びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0052i/>

純白の切り裂き魔

2010年10月8日14時20分発行